



三到図書館 ニュース

2011年4月発行
No.68

J. F. Oberlin University Library

◇巻頭メッセージ
◇読書運動プロジェクト

◇教員からのメッセージ
◇ミニツアーとガイダンスのお知らせ

◇図書館を活用しよう
◇数字で見る桜美林大学図書館

📌 巻頭メッセージ

三到図書館長就任挨拶

図書館長 前畑雪彦

読書三到とは、本を読むさい、心を集中し眼でよく見て朗読することを言い、熟読するための作法と辞書にあります。三到図書館という名前には「工読女学校」設立から始めた創立者清水安三の読書を通じた人間形成への熱い期待が込められていると思います。

これを書く時に世界の注目を集めている、ソーシャルネットワークサービス（SNS）で媒介されたエジプト革命の嵐の中心地タハリール広場を探すために、インターネットの地図検索でその首都を調べると、立ちどころに、自動車の大きさまで識別できる詳細さの衛星写真によるカイロの街路が出てきます。ここから新聞の100万人のデモの記事を頼りに、タハリール広場を探し出すことは簡単です。この操作の過程は衛星で撮影された青黒い地球全体からの絞り込みですから、操作は同時にその青色や茶色の、また内陸や海岸地域に散らばって生活している全人類69億の一構成部分の、その気候と地域とその歴史に生きる人のデモであることを実感させる過程でもあります。我々は地球市民であり、一人ひとりがかげがえのない人間としてそれぞれの希望の実現に立ち向います。その時に役立つのがインターネットで獲得する様々な情報を一個の知の体系とするそれぞれの個人の思考力です。そしてこの思考力は基本的に読書によって鍛えられます。すなわち孤独な読書過程は思考力形成過程であり人間形成過程です。創立者のこの思いを込めてその名を三到とする図書館は学生を待っています。

「三到図書館ニュース 40周年 記念特集号」（2010年11月発行、No.67）を拝読しました。ここからこの図書館の現状と改革課題、歴史について次の諸点を了解しました。

1. 閲覧席数の不足。2. 収蔵

スペースも理由の一つと考えられる学生一人当たり図書館資料費・図書費の低水準。3. 新しいメディア対応への不十分さ。4. 図書別置の不便。このような物理的な問題を解決するために新図書館建設が強く求められていること。そしてハード面のこのような困難の中で職員のプライドに満ちた働きぶり、「図書館利用教育」の組織的取り組みの開始、新聞でも取り上げられた「キャンパスを読書会で埋めよう」という読書運動プロジェクト展開等の積極的なソフト面の活動。

情報革命の時代に、「読」と「工」の伝統を受け継ぐリベラルアーツとプロフェッショナルアーツの二大部門からなる、創立者が込めた三到の名にふさわしい図書館の在り方、そこに求められるものは何かについて様々な観点からともに考え、改善してゆきたいと思っています。そのさい次の2点が重要と思います。1. 学生・教職員・地域住民の発展する知的関心を満たす、そして先の特徴を持つこの大学にとって象徴的で魅力的な空間を作り出すこと。2. 図書館職員が生き生きと働ける環境を作り出すこと。よろしくお願いたします。



古書店の楽しみ

リベラルアーツ学群教授 中 生 勝 美

インターネットが普及し、文章の賞味期限がますます短くなっています。新刊本でも、わずか数年で絶版になり、入手不可能になってしまいます。だから、求める本は自然と古本屋で探すこととなります。また古書ならば、新刊よりも若干安く売っているの、自然と新刊本も古書店で物色するほうが多くなってしまいます。なじみの古本屋もありますが、日本各地に出張するときは、日本の古本屋サイトにアクセスして、古本屋の情報を印刷して持っていくようにしています。地方の古本屋では、東京で入手できなかった本が、安価な値段で売っていたり、地方出版で、中央では知られていない地方史や民俗のすぐれた作品を見つけたりするのも楽しみです。

今まで世界各地の古本屋をめぐり歩きましたが、その中でも北京で見つけたの古本が最も印象的でした。今から十年ほど前、そこに立ち寄って驚いたのは、戦前に満洲や北京で出版された珍しい日本語の本が山積みされていたからです。

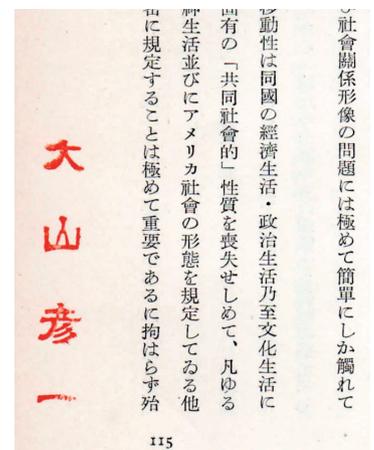
古本屋の店主に聞いたところ、北京のある大学が重複した日本語書籍を処分したということでした。日本で購入すると、1冊数万円するような貴重書が、10分の1程度の値段で売っていたので、心の中では小躍りしながら物色しました。中には、日本や中国の図書館でも見たことのない北支駐屯軍（北京・天津を中心とする北部中国を占領していた日本軍）の物資流通調査がありました。これは、日本軍が食料など生活必需品を現地で調達するため、中国各地でどのように流通市場が形成されているのか、詳細に調査したものでした。そのほか、正式に印刷される前のガリ版印刷の報告書、満洲や蒙古の傀儡政権で、現地政府の統治を議論した県参事官の議事録、各種年鑑などがありました。

古本屋の店主や、その後聞いた日本語資料の行方について詳しい研究者の話では、1945年8月に敗戦を迎えた後、中国にあった日本の機関はすべて閉鎖され、日本人の個人蔵書や日本の統治機関の蔵書は、一度すべて現地の図書館に集められ、1950年代終わりに、周恩来の命令で、旧満洲（＝東北地方）から北京に運

ばれて整理される予定でした。しかし1966年から文化大革命が勃発して、日本語資料の整理事業がとん挫し、その後一部はもともと持っていた図書館へ返還されたそうでした。しかし多くの図書は倉庫の片隅に放置されるか、最悪の場合、「外国語の本」「日本鬼子^{リーベンクイツ}の遺留物」として、紅衛兵の標的となって焼却されてしまいました。

そうした歴史を念頭に置きながら、もしかして新京（現在の長春、傀儡国家「満州国」の首都）にあった建国大学の蔵書があるのではないかと期待しました。その大学には何人も民族学者がいて、彼らが多くの蔵書をもっていたので、あるいは、その宝の山にあるのではないかと探していたところ、ふと「社会学」という雑誌が目にとまりました。彼らは、社会学会にも入っていたので、ありふれた雑誌だけれど、もしかしてと探して手に取ると、はたして建国大学の民族学者、大山彦一の蔵書印があり、鉛筆で傍線が引かれていました。この本がたどった旅路は、東京で出版され、日本統治下の満洲国にわたり、敗戦の混乱の中で持ち主の手を離れ、中国政府に管理され、その後北京近郊まで運ばれてきて、この古本屋にうずもれていたのです。

一冊の本にも歴史が刻み込まれており、長い旅路を終えて、今その本は私の書棚に並んでいます。デジタル図書は簡単で便利に入手できますが、書籍は何度も読んで線をひいたり、書架に並べて内容の関連する自分独自の体系を作り上げたりすることができます。このように、書物を味わい尽くし、読み手の思いを刻みつけることができるのです。デジタル化で便利になったことは否定しませんが、従来のモノラルな読書スタイルにも、長く培った味わいがあるのです。



 教員からのメッセージ

図書館と私

健康福祉学群准教授 福田 きよみ

私の図書館に纏わる記憶は、幼児期に遡り、公園の中に置かれていた古びた一两の車両から始まる。その車両は公園の中央を陣取っていたため、子どもたちから邪魔もの扱いされることもあったのだが、週一回、土曜日になると図書館へと変身するのであった。当時「電車図書館」と呼ばれていたその車両には、電車として使われていた時の座席がそのまま残されており、そこから手の届く範囲に低い書棚が所狭しと設置されていた。背表紙しか見えない書棚もあったが、本が開かれた状態で並べられているコーナーもあった。車内では、「読んでちょうだい」と誘っているその絵本たちを自由に手に取り、しかも、家に持ち帰ることができるというのだから、公園から車内へと子どもたちを導く数段の階段を登るとき、いつもわくわくしたものだ。今考えると、車両という「異空間」は、さらなるワンダーランドである「物語」へと子どもたちを誘う最高の舞台装置であったように思う。

その後、図書館とは様々な付き合い方をした。大学時代には、授業の合間の暇つぶしに足しげく図書館に通い、こちらの方が残念ながら頻度は少なかったが資料・文献を探しにも通った。大学院時代になると、当時は今のようにコンピュータが身近になく、情報検索と資料収集は、もっぱら図書館内で行った。特定のテーマについて過去10年間の資料を探し、その複写を手に入れることは気が遠くなるような作業だった。しかし、膨大な資料と格闘しつつ、過去の知の膨大な資産を肌で感じることができた幸せな時間でもあった。

さて、新入生の皆さんは図書館をどのように利用することになるのだろうか。私が学生時代に利用したように、授業の合間にぶらっと図書館を訪れるのもよいだろう。背表紙に惹かれ手にとった本から、思わぬ世界が開かれることもあるだろう。疲れた心が休まる本と出会えるかもしれない。また、レポート作成の資料を探しに行くこともあるだろう。

また、大学では、授業内でより積極的に図書館を利用する機会もある。私のゼミでは、論文作成の準備として、文献検索・資料収集の方法を学ぶために、図書



～人形劇の練習の合間にゼミの学生たちと～

館を利用している。たとえば、新聞記事データベースを用いて、自分が関心を抱いた題材「虐待」について調べてみる。検索してみると、皆さんが生まれた1990年初めにはほとんど記事が見当たらないのだが、ある年を境に、件数が飛躍的に多くなっていくのが即座にわかる。では、なぜ増えたのだろうか。さらなる疑問を解決するために、学術コンテンツポータルで関連文献を検索することになる。何千件もヒットするので、検索機能を用いて絞りながら、重要となる文献を探し出すことになる。そして、実際にその文献を入手する。文献が手に入らなければ、図書館のリファレンスを利用することになるだろう。私が大学生の頃と比べ、なんと便利になったことだろう。

21世紀は「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す」（高等学校学習指導要領解説 総則編）とされる。これからの情報化社会では、容易に、しかも大量に得ることができる情報を、単に得るだけでなく、どのように取捨選択し活用するかといった「情報リテラシー」を習得することが非常に大切になってくるだろう。図書館は、この点に関しても皆さんを支援してくれるに違いない。

書籍の電子化やインターネットの活用方法の変化等で、図書館はこれからどんどん変わっていくだろう。おそらく非来館利用も増えるに違いない。しかし、図書館がどのような形態をとるようになるとしても、わくわくする知の「ワンダーランド」の入り口へと我々を誘うものであってほしいと思う。みなさんも素敵な「ワンダーランド」と出会えますように。

図書館を活用しよう！

■ 図書を探すには…

桜美林大学図書館では、約50万冊の図書を所蔵しています。その中から自分が読みたい本（図書）を探すにはOPAC（蔵書検索システム）を使うと便利です。本のタイトルや著者が分っている場合、また、ある特定のテーマについて書かれた本を探す場合には、OPACで検索して見つけることができます。また、ブラウジング（書棚の間を散策しながら本を探すこと）という方法もあります。これは、探している本のテーマが漠然としている時に適しています。本の背や表紙を見たり実際に本を手にとってみたり、ページをバラバラとめくってみたりすることで、思いもかけない素敵な本に出会える楽しみがあります。

でもOPACやブラウジングで探してみただけで、本学図書館に読みたい本が見つからない場合はどうすればいいでしょうか？ そういうときは、近くの公共図書館や、国立国会図書館を利用してみましょう。公共図書館には、大学図書館ではあまり所蔵していない、実用書や郷土資料等が充実しています。桜美林大学の学生は、町田市立図書館と相模原市立図書館を利用することができます。また、国立国会図書館には、国内で刊行した本を納本する「納本制度」により、膨大な量の本が納められています。どこの図書館（大学・公共等）でも持っていない、また絶版のため手に入らないという本でも、一部の貴重書を除き、閲覧することができます。インターネットにはNDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索システム）が公開されています。利用してみたいけれど、よくわからないという時には、本学図書館のレファレンスカウンターまで相談に来てください。

学生時代に図書館を活用してたくさん読書をしましょう。（情報サービス課 村上祐司）

■ 洋書を読んでみよう！

もっと英語に力を入れたい人、英語力を伸ばしたい人、英米文学作品を読みたいけど難しそうだし、どういうのを選べばいいのかわからない人、さまざまだと思います。

図書館にはたくさんの洋書を揃えておりますが、今回は洋書の中でも一番親しみやすいリーダ本を紹介したいと思います。

Graded Readersは英語を勉強する方のためにより簡単に楽しく読書ができるようにレベル別に作成された英語教材です。レベルは初級者用から上級者用まであり、辞書なしでも読書を楽しめるように工夫されています。

Penguin Readersには『Tom Cruise』や『Jennifer Lopez』などの有名人のサクセスストーリーなどもあれば、Oxford Bookwormsでは『Robin Hood』の漫画などもあります。

また、英米文学では一度は聞いたことのある、『A Christmas Carol』や『Gone with the Wind』(風と共に去りぬ)などの作品もありますので、文学作品は難しいと言う前に一度自分の目で確かめてみてはどうでしょうか？ 図書館3F、レファレンスカウンターの横にGraded Readersは揃えてありますので、一度手にとって読んでみてください。『地球の歩き方』の隣です。

本館6Fには、英語の専門書などさまざまな分野の本がありますので、6Fにも足を運んでみてください。（事務課 糸数ナンシー美香）



■ 図書館で新聞を読もう！

図書館には色々な種類の新聞があります。総合紙の『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』、経済ニュースに特化した『日本経済新聞』、地方紙では『東京新聞』と『神奈川新聞』の他、沖縄の新聞も2紙あります。また、海外の『The New York Times』、『The Times』や、日本で発行されている英字新聞などもあるので、語学の勉強に役立てることもできます。当日の新聞ばかりでなく、4か月前までの新聞も溯って読むこともできます。

どこの家庭でも、新聞は購読していると思いますが、こんなに沢山の新聞を同時に読むことができるのは、図書館だけです。今日の一番のニュースは何か、どう取り上げているのか、各新聞の視点に違いがあり、それを読み解く

のも中々興味深いものです。写真の扱いだって違います。物事には、色々な見方や考え方があることがわかります。

図書館は、授業の開始時間より早く、朝8時30分から開館しています。授業の前に、思考のトレーニングに立ち寄ってみてはいかがですか？ お気に入りの新聞が見つかるかも知れませんよ。私のお勧め記事は、『朝日新聞』の日曜日の朝刊に毎週掲載されている、朝日求人『仕事力』です。様々な分野の人々が仕事について熱く語っています。就職活動にも役立つと思いますので、ぜひ、読んでみてはいかがですか。

新聞には、インターネットやテレビのような即時性はありませんが、ニュースの分析や解説などをじっくりと読むことができ、洗練された視点を培うことができると思います。（事務課 中島真由美）



日本の主な新聞のほか、海外の新聞も多数揃えています（1F新聞コーナー）

■ リンクリゾルバを使って電子資源を活用しよう！

スマートフォンやiPad、Kindleなど、電子化コンテンツ対応の機器競争が激しくなっています。出版業界は様々なコンテンツを電子化するようになってきており、図書館にも電子化の波は押し寄せています。欧米では各出版社で発行するジャーナルを電子化することは一般的です。大学図書館では洋雑誌の価格高騰や収容スペースなどの問題から、冊子の購入を中止し、電子ジャーナルへ移行するところも増えています。本学でも、電子ジャーナルやデータベースの契約数が年々増加しており、図書館ホームページから、図書館で契約している多くの有料データベースを利用することができます。

みなさんは論文を探るとき、どのデータベースを利用されるでしょうか。日本の論文ならCiNiiやMAGAZINEPLUS、海外の論文ならProQuest、心理学関係の先行研究ならPsycINFO（海外）、医中誌（日本）といったところでしょうか。あなたが探している論文は、CiNiiやProQuest、JSTOR、SpringerLinkなどのデータベースで、フルテキストが提供されているかもしれません。しかし、データベースひとつひとつに当たって検索・確認することは大変な作業です。このような問題を解決してくれるのが、リンクリゾルバという電子ジャーナル探索ツールです。

本学ではExLibris社の“SFX”というリンクリゾルバを2010年10月に導入しました。リンクリゾルバとは、図書館で提供する電子資料を中心とした様々な資源をリンクで結ぶ探索ツールです。図書館ホームページの「電子ジャーナル」をクリックすると、本学が契約しているジャーナルやデータベースに収録されているジャーナル（フルテキストで利用できるもの）がタイトルリストから確認できます（図①参照）。また、分野からも検索することができます。

もう一方で、CiNiiやProQuestなどのデータベースを検索したとき、検索結果に「桜美林」といったアイコンが表示されます。アイコンをクリックすると、中間窓が表示され（図②参照）、その論文（掲載誌）を本学で所蔵しているか、もしくは電子ジャーナルとして利用できるかといったことを確認することができます。利用できない場合は、「文献複写申込」のリンクをクリックすると、「マイライブラリ」の文献複写依頼画面に論文情報が自動的に流し込まれ、依頼をかけることができます。

ぜひ、このようなツールを活用して、図書館が提供する電子資源を探索してみてください。あなたもこれを使いこなせば、論文探索の上級者です！（事務課 高橋瑞江）

図①



図②



図書館読書運動プロジェクト活動報告



2010年12月17日の昼休みに、学而館1階ラウンジにおいて、2010年読書マラソン桜美林コメント大賞の表彰式が開催されました。ラウンジに、日本人学生、留学生の他、教職員の皆様が多数お集まりくださいました。今回は読売新聞社の取材もあり、実行委員会の学生メンバーたちはやや緊張気味の様子でしたが、新井七瀬さん（ビジネスマネジメント学群）、留学生のドラムスレンさん（リベラルアーツ学群／モンゴル）の司会により、恒例の桜美林コメント大賞表彰式が始まりました。



図書館読書運動プロジェクト（通称、読プロ）は、学生＋教職員＋図書館＋生協が協同し、キャンパスを読書で盛り上げよう！ というプロジェクトです。今年で5年目を迎える読プロですが、今年読書コメント応募総数は1,096枚…遂に念願のコメント1,000枚突破を達成しました！ 1,096枚のコメントから候補作を選考する作業は学生メンバーが中心となって行いました。授業、テストの合間を縫って1,000枚を超えるコメントを読み込んで、50枚程度に絞り込むという困難な作業でしたが、学生たちはがんばりました。候補作品はどれも甲乙つけがたい力作揃いでしたが、その中から最終的に、桜美林コメント大賞、図書館賞、学生賞などが選定されました。

それではコメント大賞に輝いた2作品を紹介します。

桜美林コメント大賞『告白』（湊かなえ著）

鈴島里奈さん 総合文化学群2年

タイトルが「告白」である通り、この本はそれぞれの登場人物が自分たちの罪や色んなことを「告白」していきます。思春期のデリケートな若者たちの少し歪んだ人生観には恐怖を感じました。何が正義で何が悪なのか、この本を読んで改めて考え直されます。先生、復讐おめでとう。

鈴島さんは、正義と悪の境界線はどこだろう？ 自分がこのクラスの生徒だったらどうする？ さまざまなことが脳裏に浮かんだそうです。そして、最後の一言が効きました。

留学生コメント大賞『人間失格』（太宰治著）

RJ留学生 ガブリエル・ブラウンさん／アメリカ

人間という存在の寂しさや孤独をきちんと表現していて大変感動した。ちょっと悲しい話なのに強い印象が残った。人間の真実というものがこの本を読んで初めてわかったような気がしたのだ。本当に他人をわかるといえるのは無理なのかもしれない。だが、それをわかろうとする事が人間として生きるということなのではないだろうか。

ガブリエルさんは、この日本文学を代表する作品を読んで、人が分かり合うための困難さには国境はないということ、それでも諦めてはいけないということを感じとりました。

最後に、読プロ実行委員会学生メンバーからのコメントを紹介します。

 イベントを作り上げるためには、多くの人との繋がりが重要です。今年度は読書会などのイベント活動が楽しく、多くの人に読プロを知っていただくために全力で頑張ります！（リベラルアーツ学群3年 菊地美咲さん 2011年度実行委員長）

☐ 支えてくれた方々の意志を受け継ぎ、よりいっそう「読書の楽しさ」をみなさんに伝えていけるように頑張っています！(リベラルアーツ学群3年 杉山栄美さん)

☐ 生協留学生委員会として、留学生部門を担当しました。表彰式での留学生の笑顔が嬉しかったです。来年こそは目指せ100枚！(リベラルアーツ学群3年 清都裕章さん)

☐ 本好きの仲間と好きな作家について語り合い、とても有意義な活動が出来ました。みんなで読書を共有するため、読書会を盛り上げられるよう頑張ります！(リベラルアーツ学群4年 新田百香さん)

☐ 2010年度の読書運動プロジェクトは、参加するメンバーも増え、以前からの目標も達成できて非常に良かったと思います。ただ、その活動を次へ次へと繋げていくことはとても大変でしょう。後輩のみなさんには、楽しみながら積極的に読書運動を桜美林大学に広げていってほしいです。「楽しみながら」活動することが、一番大切だと私は思っています。(リベラルアーツ学群1期生 立道絵理さん)

立道さんは、1年生の時から読プロに参加し、念願のコメント1,000枚突破を達成して、2011年3月に卒業・就職されました。後輩たちへ贈る真摯なメッセージです。今回も、学生諸君はもとより、学内外から多くの皆様のご協力をいただきました。読プロを代表してお礼申し上げます。

新入生のみなさん、仲間たちといっしょに、図書館を舞台にした読書を盛り上げる活動に参加しませんか？(情報サービス課 佐々木俊介)



念願のコメントカード1,000枚達成で実現した、サンタに扮した学長との記念撮影

図書館ミニツアーと情報検索ガイダンス開催のお知らせ

館内ミニツアー開催

4月4日(月)～5月13日(金)の月～金曜日の12:20～

集合場所：図書館本館3F レファレンスカウンター前※

今年も毎年恒例となっている図書館の館内案内のミニツアーを開催します。平日のお昼休みの約20分で、図書館内の主なコーナーと利用方法などの案内を行ないます。参加希望者は、12:20までに集合してください。(予約は不要です)

※レファレンスカウンターは、読書運動プロジェクトの展示コーナーのとなりにあります。

情報検索ガイダンス開催

4月28日(木) 3時限目、5月13日(金) 3時限目、5月26日(木) 3時限目、
6月10日(金) 4時限目、6月23日(木) 4時限目

集合場所：図書館本館3F レファレンスカウンター前

※予約は不要です。どなたでもご参加いただけます。7月以降の開催予定は、図書館HPやe-campus等でお知らせいたします。

図書館では、今まで『LAセミナー』、『ビジネスの基礎』等で、1年生向けの図書館の基本的な利用方法・活用方法に関するガイダンスを行なってきましたが、今年は、主に3・4年生の皆さんのゼミ論・卒論向けのガイダンスにも力を入れていく予定です。ゼミ論・卒論を書くにあたっての、基本的な資料の探し方、情報検索ツールの紹介・実習などの情報検索ガイダンスを定期的で開催していきます。

そのほかに、夏以降は、「雑誌の論文を利用する」「新聞を利用する」といったテーマ・目的別のガイダンスも開催していく予定です。また、ゼミの先生からの要望や、個人・グループなどからの要望にあわせてかたちのガイダンスも行ないますので、「こんな内容のガイダンスをやってほしい」「こういった資料の活用方法を教えてほしい」といった要望がありましたら、お気軽にお問い合わせください。個別のテーマについての質問等は、レファレンスカウンターでも受け付けていますので、こちらも活用してください。

数字で見る桜美林大学図書館(1)



これからみなさんが利用する大学図書館には、どれくらいの人がどれくらい訪れているのでしょうか？ 2009年度、2008年度の2年間を表にしてみました。

図書館入館者統計	2009年度				2008年度			
	所属	本館	メディア室	四谷	計	本館	メディア室	四谷
① 総合文化学群	8,496	1,479	5	9,980	8,109	1,420	0	9,529
② 健康福祉学群	11,621	1,209	0	12,830	8,998	849	0	9,847
③ ビジネスマネジメント学群	13,553	703	0	14,256	12,534	774	2	13,310
④ LA学群	45,944	2,356	103	48,403	25,229	2,236	1	27,466
学群計	79,614	5,747	108	85,469	54,870	5,279	3	60,152
⑤ 大学院	6,897	160	9,396	16,453	6,955	193	9,355	16,503
その他学生	21,975	906	956	23,837	40,535	2,092	908	43,535
⑥ 教職員	3,843	735	354	4,932	4,112	722	349	5,183
学外者	207	12	17	236	104	0	2	106
⑦ 合計	112,536	7,560	10,831	130,927	106,576	8,286	10,617	125,479

(注)大学院四谷キャンパス図書室は2008年度からオープン

現在は、4学群(①から④)と大学院(⑤)の所属学生が中心となっており、年々利用が伸びています。⑥のその他の学生(旧学部・学科)は在籍学生が減少していくため、利用も減っています。2009年度と2008年度は、それまでの学部制度から学群制度への移行期間のため、2008年度の学生在籍者数は総合文化学群(1~4年生:1,000名)、健康福祉学群(1~3年生:701名)、ビジネスマネジメント学群(1~3年生:1,371名)、リベラルアーツ学群(1~2年生:2,243名)、大学院(修士・博士課程:424名)、2009年度は総合文化学群(1~4年生:1,105名)、健康福祉学群(1~4年生:937名)、ビジネスマネジメント学群(1~4年生:1,843名)、リベラルアーツ学群(1~3年生:3,345名)、大学院(修士・博士課程:419名)と、全体的に増えています。反対に⑥その他の学生(旧学部・学科)は在籍学生が減少していくため、利用も減っています。

図書館本館(表:本館)では図書と雑誌を中心に所蔵しており、データベースや学習用PC利用も活発に行われています。情報メディア室(表:メディア室)はDVD、ビデオなど映像・音楽資料があり、視聴ブースも用意されています。2008年度からオープンした四谷キャンパス図書室(表:四谷)利用の主体は大学院生です。

2009年度と2008年度を比較すると、学群生の本館への入館者数は60,152人から85,469人へと大きく伸びており、実際、学生数も増えているのですが、それでも2009年度は学生増加率32.7%に対して、利用者増加率は33.0%と安定した利用が見て取れます。総合文化学群は451人、健康福祉学群は2,983人、ビジネスマネジメント学群は946人の増加、リベラルアーツ学群は20,937人と大きく増えています。この文章を書いている時点(2011年3月)では、まだ2010年度の最終的な数字が出ていないのですが、1月末までの状況を確認すると、総合文化学群11,329人、健康福祉学群11,859人、ビジネスマネジメント学群15,157人、リベラルアーツ学群58,436人、大学院17,892人、全体でも131,440人と、2009年度に比べても入館者は増加しています。

大学時代に学ぶこと、大学時代だからこそ学べることはたくさんあります。しかしそれらはすべて皆さんが「何かを知りたい」「学びたい」「知識を得たい」「成長したい」と思うところから始まります。そう思ったら、まず最初に図書館に来てください。図書館には図書、雑誌、新聞、年鑑、白書、統計、報告書、論文、様々な視聴覚資料、データベースがあります。皆さんが知識を身につけるためのツールが揃っています。大学での学びの基礎は読書です。読書することで、皆さんは広い世界に向けて、新しい一步を踏み出すことになるのです。そのための施設が図書館です。図書館は皆さんを待っています。2011年度も大いに図書館を利用してください。

(次回は、資料の貸出状況について紹介する予定です)

● 編集後記 ●

「温故知新」という言葉があります。例えば中国の Google とも言うべき「百度(Baidu)」という巨大な検索エンジンがありますが、この社名は実は意外なところから来ています。「蛾兒雪柳黃金縷、笑語盈盈暗香去/ 眾裡尋他千百度、驀然回首、那人卻在、燈火闌珊處(蛾や雪柳の髪飾り 黄金の糸 漂う香り 笑いさざめき 去ってゆく/人込みの中で何度も何度もあの人を探し ふと振り返れば 思いきやあの方は 薄明りの灯の傍に立っていた)」これは宋代の政治家・文人、辛棄疾(1140-1207)の「青玉案・元夕」という詞の一節。現代を象徴する検索エンジンを提供する社名が、八百年も昔の詞に由来しています。こんなことから図書館で古典を紐解いてみるのも、なかなか味わい深いものです。(情報サービス課 佐々木俊介)